

東京大学総合研究博物館動物部門の魚類コレクションの歴史

History of the fish collection of the Department of Zoology, The University Museum, The University of Tokyo

小枝圭太^{1,2*}・畑 晴陵³⁾・藍澤正宏¹⁾・坂本一男^{1,4)}・上島 励^{1,5)}

Keita Koeda^{1*)}, Harutaka Hata²⁾, Masahiro Aizawa¹⁾, Kazuo Sakamoto^{1,2)}, Rei Ueshima³⁾

¹⁾東京大学総合研究博物館 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

The University Museum, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

²⁾琉球大学理学部海洋自然科学科 〒902-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地

Faculty of Science, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Okinawa 902-0213, Japan

³⁾国立科学博物館分子生物多様性研究資料センター 〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

Center for Molecular Biodiversity Research, National Museum of Nature and Science, 4-1-1

Amakubo, Tsukuba, Ibaraki 305-0005, Japan

⁴⁾おさかな普及センター資料館 〒135-0061 東京都江東区豊洲 6 丁目 6-1

Fish Information Center and Museum, 6-6 Toyosu, Koto-ku, Tokyo 135-0061, Japan

⁵⁾東京大学大学院理学系研究科 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

Department of Biological Sciences, Graduate School of Science, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

*Corresponding author: hatampo@gmail.com or koeda@um.u-tokyo.ac.jp

Abstract

The history of the ZUMT collection's accumulation and the related people were organized in chronological order on the basis of specimen ledgers and references. As a result, the history and chronological activity of the specimen collection over the approximately 120 years from 1904 to the present were clarified.

はじめに

東京大学総合研究博物館動物部門所属の魚類コレクション (ZUMT: The Department of Zoology, The University Museum, The University of Tokyo) は、1900 年代の初頭より集積された日本最古の魚類標本コレクションである。2022 年 3 月現在、約 64000 点の魚類標本が登録、収蔵されており、一つの登録番号に複数個体が登録されていることもあることから、その総数は 15 万個体とも推定されている。2021 年より、同コレクションの管理、整理ならびに目録化を目的とした整理作業が進められており、その過程でこの約 120 年の間に ZUMT 標本に関わった様々な人たちの活動やライフイベント、災害、戦争にともなう ZUMT 標本との関係の変化などが明らかになってきた。また、標本台帳に記載された情報を整理することにより、年代毎の標本の増加数やコレクションの活性や推移についての理解が深まった。本稿においては、今後の目録作成および標本利用の一助となることを目的として、現時点で集積された知見を整理し、利用可能とすることを目的とした。

材料と方法

ZUMT 魚類標本に関わる人物および組織の動向を年単位で整理した。年表作成には ZUMT 標本台帳ならびに以下に示した文献および未発表資料を参考にした。なお、参考文献により同じ動向に対して異なる年が示されていた場合は、文献の信頼性の高さや他の動向との整合性に則って判断した。また、各年において登録された標本番号および標本数を台帳に記録された各年の最も若い番号をもとに計数した（これらは標本の採集年ではなく、登録年を示す）。

参考文献

- Abe, T. 1939. A list of fishes of the Palao Islands. *Palao Tropical Biological Station Studies*, 1 (4): 523–583.
- 阿部宗明. 1975. 名誉会員 田中茂穂先生を偲ぶ. *動物学雑誌*, 84 (1): 93.
- 阿部宗明. 1981. I. 故富山一郎博士追惜の辞. *動物学雑誌*, 90 (3): 398.
- 赤松邦太郎. 1904. 白魚. *動物学雑誌*, 191: 323–344.
- 青木赳雄. 1913. 静岡縣田方郡内浦村附近魚類. *魚学雑誌*, 1 (5): 11–12.
- 福地定吉・金子一狼. 1913. 長崎産フカに就て. *魚学雑誌*, 1 (2): 16–18.
- 不破 茂. 2015. 昭和の釣りの碩学・松崎明治. *ミュージアム知覧紀要・館報*, 14: 47–52.
- 蜂須賀正氏. 2006. 南の探検. 平凡社, 東京. 484 pp.
- 畑井新喜司. 1940. パラオ熱帯生物研究所及其の事業に就て. *科学南洋*, 3 (1): 3–11.
- 本誌記者 (著者名不明). 1936. 「南洋の家」山村家を訪ねて. *南洋水産*, 18: 42–43.
- Hubbs, C. L. 1975. Shigeo Tanaka, 1878–1974. *Copeia*, 4: 792.
- Iijima, I. and Sasaki, C. 1882. Okadaira Shell Mound at Hitachi, Being an Appendix to Memoir Vol. I, Part I of the Science Department, Tokio Daigaku (University of Tokio). Tokyo Daigaku, Tokyo. 66 pp.
- 石田寿老. 1942. 樺太のイワナ (I) アメマスとエゾイワナ. *動物学雑誌*, 54 (9): 347–353.
- 岩見哲夫. 1997. 阿部宗明先生のご逝去を悼む. *タクサ*, 2: 1–2.
- Jordan, D. S. and Evermann, B. W. 1902. Notes on a collection of fishes from the island of Formosa. *Proceedings of the United States National Museum*, 25 (1289): 315–368.
- Jordan, D. S., Tanaka, S. and Snyder, J. O. 1913. A catalog of fishes of Japan. *The journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo, Japan*, 33: 1–479.
- Jordan, D. S. and Tanaka, S. 1927. The fresh water fishes of the Riukiu Island, Japan. *Annals of the Carnegie Museum*, 17 (2): 259–280+xxii–xxiii.
- 嘉数 修. 2011. 黒岩恒の著作物および新聞掲載記事について. *資料編集室紀要*, 34: 11–32.
- 金子一狼. 1913. 長崎方言の「カナガシラ」. *魚学雑誌*, 1 (1): 13–16.
- 金子一狼. 1913. 長崎方言のグチ. *魚学雑誌*, 1 (4): 5–8.
- 河上才次. 1913. 熊本附近魚類. *魚学雑誌*, 1 (4): 15–19.
- 木下盛枝. 1928. 柳河ノ淡水魚. 福岡県柳河高等女学校, 柳河. 4 pp.
- 小枝圭太・上島 励. 2022. はしがき. 東京大学総合研究博物館標本資料報告, 128: i–vi.
- 高知大学文理学部生物学教室同窓会. 1965. 蒲原稔治博士退官記念誌. 高知大学文理学部生物学教室同窓会, 高知. 28 pp.

- 黒田長礼. 1927. 比律賓群島ベシラン島採集鳥類に就て. 鳥, 5 (23): 199–261.
- 黒岩 恒. 1927. 琉球島弧に於ける淡水魚類採集概報. 動物学雑誌, 39 (467): 355–388.
- Masuda, S. 1942. Notes on the Japanese fishes of the genus *Epinephelus*. *Annotationes Zoologicae Japonenses* 21: 106–123.
- 松井 魁. 1983. 書誌学的水産学史並びに魚学史. 鳥海書房, 東京. 203 pp.
- Matsuura, K. 1997. Fish collection building in Japan, with comments of major Japanese ichthyologists. Pp. 171–182. In: Pietsch, T. W. and Anderson Jr., W. D. (eds.) *Collection building in ichthyology and herpetology*. The American Society of Ichthyologists and Herpetologists, Kansas, U.S.A.
- 眞作佳吉. 1985. ぎんざめノ一新属ニ就キテ. 動物学雑誌, 7 (80): 182–184.
- 宮崎 直・金子一狼. 1913. 長崎縣産の魚類方言に就て. 魚学雑誌, 1 (2): 16.
- Okada, Y. 1927. A study on the distributin of tailless batrachians of Japan. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 11: 137–143.
- 岡田弥一郎. 1931. 渡瀬先生と日本生物地理學會. 動物学雑誌, 43: 508–510.
- 岡田弥一郎. 1936. 南洋の思ひ出. 動物学雑誌, 48: 8–10.
- 瀬能 宏. 1998. 研究ノート 魚学史—日本の魚を研究した人たち. 自然科学のとびら, 4 (2): 10–11.
- 鈴木 実. 1981. 恩師加藤光次郎博士と分類学. 動物分類学会会報, 54: 5–10.
- 田中徳久・高橋秀男. 2007. 「宮代コレクション」の神奈川県レッドデータ植物. 神奈川自然誌資料 (28): 29–38.
- 田中茂穂. 1908. 飯島博士採集南樺太の魚類に就いて. 動物学雑誌, 20 (232): 33–47, pl. 3.
- 田中茂穂. 1913. 魚類の採集保存及運送法. 田中茂穂, 東京. 6 pp.
- 田中茂穂. 1913. 簡易魚類採集法. 魚学雑誌, 1 (1): 2–5.
- 田中茂穂. 1913. 信州及び北陸道旅行記. 魚学雑誌, 1 (2): 18–20.
- 田中茂穂. 1913. 各地研究者小照 (二). 魚学雑誌, 1 (2): 20.
- 田中茂穂. 1913. 各地研究者小照 (四). 魚学雑誌, 1 (4): 29.
- 田中茂穂. 1918. 東京市場の鮮魚に就て (豫報). 動物学雑誌, 30 (356): 242–243.
- 田中茂穂. 1926. 食用魚類. 南効社, 東京. viii+310 pp.
- 田中茂穂. 1928. 同種か別種かを鑑別する標準. 動物学雑誌, 40 (481): 433–447.
- Tanaka, S. 1931. On the distribution of fishes in Japanese waters. *Journal of the Faculty of Science, Imperial University of Tokyo. Section 4, Zoology*, 3: 1–90, pls. 1–3.
- 田中茂穂. 1933. 動物及び植物に於ける種類とは何ぞや, 同一種内に起こる品種とは何ぞや. 動物学雑誌, 45 (540): 411–452.
- 田中茂穂. 1934. 奇魚珍魚. 興学会出版, 東京. viii+210 pp.
- 田中茂穂. 1935. 魚の随筆. 龍星閣, 東京. 224 pp.
- 田中茂穂. 1948. 大東亜の魚. 文祥堂, 大阪. 172 pp.
- 東京大学総合研究資料館. 1984. 遠隔と現状. 総合研究資料館ニュース, 1: 3–6.
- 富永義昭・佐藤寅夫. 1973. 標本瓶について. 魚類学雑誌, 20 (1): 53–55.
- 富永義昭. 1981. 富山一郎先生を偲ぶ. 魚類学雑誌, 28 (1): 108–109.
- 富永義昭. 1988. 田中茂穂 (1878–1974). Pp. 325–331. In: 木原 均・篠遠善人・磯野直秀 (編) 近代日本生物学者小伝, 平川出版社. スカイビュープランニング, 東京. 197 pp.

- 富永義昭. 1991. 寒天の利用. 総合研究資料館ニュース, 22: 2–3.
- Tomiya, I. 1972. List of the fishes preserved in the Aitsu Marine Biological Station, Kumamoto University, with notes on some interesting species and descriptions of two new species. Publications from the Amakusa Marine Biological Laboratory, Kyushu University, 3 (1): 1–21.
- 富山一郎. 1975. 田中茂穂先生に師事して. 魚類学雑誌, 22: 119–124.
- 富山一郎. 1979. 魚類の標本. 東大資料館収蔵資料, 11: 26–31.
- 椿 六郎. 2006. 富永シヅ物語—国産初の冷凍車を走らせた女性.
- 上野輝彌. 1994. 富永義昭博士を偲んで. 魚類学雑誌, 41 (3): 351.
- 宇井縫蔵. 1924. 紀州魚譜. 紀元社, 東京. 282+43 pp.
- 山村八重子. 1937. 南洋生物採集行脚秘録. 南洋水産, 3 (5): 33–40.
- 柳井隆一. 1950. 山陰の魚類. 動物学雑誌, 59 (1): 17–22.
- 矢野正敏. 1980. 魚学者田中茂穂の生涯. 日本病跡学雑誌, 19: 66–70.

参考資料

- 故田中茂穂博士生誕百年記念の集いパンフレット. 1978年8月16日開催. 東京海洋大学附属図書館アーカイブス宇田道隆文庫
- 高知市立龍馬の生まれたまち記念館ホームページ. 2018. 学芸員エッセイ その39 「近代日本の魚類学者・田中茂穂」. <https://ryomahometown.com/20180327/essay39.html> (アクセス日時: 2021年3月29日)
- 牧野富太郎. 1930–1944. 牧野富太郎の日記. 東京大学総合研究博物館所蔵.
- 三崎臨海実験所ホームページ. 三崎臨海実験所の歴史. <https://www.mmbs.s.u-tokyo.ac.jp> (アクセス日時: 2021年3月29日)
- 富永義昭. 未発表原稿. 田中茂穂博士の業績. 東京大学総合研究博物館所蔵.

謝辞

本報告を取りまとめるにあたり、元国立科学博物館の松浦啓一氏、神奈川県立生命の星・地球博物館の瀬能 宏氏および和田英敏氏、北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）の日比野友亮氏、東京大学総合研究博物館の池田 博氏には ZUMT に関わった人物に関する貴重な情報や文献を提供いただいた。東京大学総合研究博物館ボランティアの尾形比呂哉氏、阿部意央太氏、藤原咲紀氏、飯沼 藍氏、齋藤 舞氏、高橋あゆみ氏、深谷真央氏、伊藤想也氏には標本整理に際して多大なご協力を頂いた。本研究の一部は、第1著者への日本学術振興会科研費 21K06313 JP および日本学術振興会笹川科学研究助成金（2021-4064）の助成を受けた。

ZUMT 魚類標本の歴史

ZUMT 魚類標本に関わる人物および組織の動向が整理され、人物間の相関関係や組織の改変、災害、戦争による ZUMT 魚類標本への影響が明らかになった。コレクションの沿革については、小枝・上島（2022）を参照のこと。

ZUMT 魚類標本の収集と管理を始めた田中茂穂は 1904 年より本格的に収集と登録を始めた (Fig. 1)。当初は動物学教室の教員が収集していた標本の登録作業が中心で

あり、新たな収集標本は少ない。年間の標本登録数は 1900 年代で 167 標本/年、1910 年代で 688 標本/年、1920 年代で 1014 標本/年、1930 年代で 2073 標本/年と加速度的に増加するが、これは 1911 年より田中が編纂した「日本産魚類図説」の影響により全国に標本提供ネットワークが構築されたことに加え、1930 年代に入り富山一郎や阿部宗明が標本登録作業に参加したことも大きく影響したであろう。当時の田中が築いたネットワークは驚異的で、47 都道府県すべてから標本が集まっていることはもちろん、樺太、朝鮮、中国、台湾、フィリピンをはじめとする海外（時代によっては国内ともいえる）より、実に網羅的に魚類を収集しており、その協力者の数は 1000 人に迫る。田中の収集した標本のほとんどはホルマリン液浸で保存され、布地に墨で書かれたタグが付されているため明瞭であるが、ZUMT 2000 番台以前の初期のものは紙に鉛筆書きされているためタグの取り扱いには注意が必要である。なお、1904 年から始まった ZUMT 標本の集積は、1939 年末の時点で約 40000 点に及んでいる。この時点で未登録であった標本が、1940 年以降も多数登録されている点を考慮すると、ZUMT 魚類標本のほとんどは 1940 年以前に採集されたものと表現しても差し支えないであろう。

1940 年代には登録数が 735 標本/年と大きく落ち込んだ。これは、太平洋戦争による研究活動への重大な影響に加え、田中の定年退官（1938 年）、富山の中国への赴任（1937 年）が重なったことに起因するであろう。また、田中門下の次世代を担うべき犬尾三郎や増田繁雄が太平洋戦争により若くして亡くなってしまったことも、その後の動向に大きく影響したものと推察される。この期間中の標本登録数が 0 であった年が 7 年もあることから、この約 10 年がいかに研究者にとって難しい時代であったかが窺える。なお、1941 年と 1943 年に年間 3000 を超える標本が登録されている点は驚愕であるが、これらの大部分は古い標本であり、1940 年代前半に魚類採集をおこなった痕跡はほとんどみられなかった。ただし、阿部は自身で採集した標本は標本タグの標本番号に下線を付した別コレクションとして管理していたことから、阿部自身がこの期間に魚類の採集をおこなっていたかは不明である。

阿部が 1947 年に農林省東海区水産試験所に任官したことにより、1950 年代の標本登録数は減少し、富永義昭が大学院生として富山の門下生となる 1959 年を除くと、183 標本/年となる。その後は、1960 年代で 152 標本/年、1970 年代で 182 標本/年と、登録数が 100 未満である年が多くなるが、1983 年に藍澤正宏が富永事務所に入ると登録数が再び増加し、1989 年には 2500 標本以上が登録されるなど、1980 年代は 467 標本/年となる。その後は 1991 年に藍澤が富永事務所を退職することにより、登録数が著しく減少して、現在に至る。

以下に各年における ZUMT 魚類標本に関わる人物および組織の動向を列挙する。

【1895 年】

篤作佳吉により日本人による初めての魚類新種が記載される。記載された種は *Harriotta pacifica* (Mitsukuri, 1895)（現在は属 *Rhinochimaera*）テングギンザメで、相州栗濱（現在の横須賀市久里浜）の漁師が三崎沖の深海で漁獲した個体を東京市場で購入した。ただし、記載に用いられたホロタイプ（ZUMT 1453）の所在は不明。

【1900 年】

David Starr Jordan の研究グループが来日する。

【1901年】

田中茂穂が東京帝国大学理学部動物学科に入学する。

【1903年】

田中が箕作のもとで魚類の研究を始める。

【1904年】 ZUMT 597-913 (年間登録数 317 標本)

田中が 26 歳で東京帝国大学理学部動物学科を卒業。魚類コレクションの収集と ZUMT への登録を開始する。登録当初は外国産と国内産を異なる標本台帳に記録しており、最も古い標本 (ZUMT 597 : D.S. Jordan より寄贈された外国産標本) は 1904 年 5 月 19 日に登録されている。ZUMT 596 以前の標本およびそれらの台帳の所在は不明である。同年初夏に Alan Owston が所蔵したテングギンザメ標本の写真が撮影される。

【1905年】 (登録なし)

田中が 27 歳で東京帝国大学理学部動物学科の助手に就任する。2 度目の来日である Jordan に会い、文科省の補助を受けて調査に協力する。田中による初めての魚類の新種記載 (*Chimaera jordani* Tanaka, 1905 ジョルダンギンザメおよび *Chimaera owstoni* Tanaka, 1905 オーストンギンザメ) をおこなう。これら 2 種のタイプシリーズはいずれも所在不明。田中が結婚。

【1906年】 ZUMT 914-964 (51 標本)

3 月に田中と青木熊吉が陸前牡鹿郡女川村 (現在の宮城県女川町) および竹の浦 (石巻市) へ採集紀行。魚類だけでなくカメホウズキチョウチン (UMUTZ-Bra-AB-30) など無脊椎動物も採集する。

【1911年】 ZUMT 2929-3204 (276 標本)

Jordan が 3 度目の来日。田中は講師として Jordan の三崎臨海実験場での採集に協力する。田中が日本産魚類図説の編纂を開始する。

【1912年】 ZUMT 3205-3412 (208 標本)

田中が 5 月に信州と北陸へ旅行し、各地の師範、中学、高等女学校を訪問する。

【1913年】 ZUMT 3413-3817 (405 標本)

1235 種の魚類を収録した「日本産魚類目録」を Jordan および John Otterbein Snyder と共著で発表する。田中は本論文の原稿を渡米して Jordan に校閲を依頼した。その際、わずかな修正とともに Jordan 自身も共著者として入りたいとの申し出を受けたことを大変喜んだという。田中が私費で魚学雑誌を創刊するが、同年中に 1 巻 7 号まで出版し、廃刊となる。

【1915年】 ZUMT 4351-6906 (2556 標本)

田中が本年より 1918 年にかけて動物学雑誌に「日本産魚類の〇〇新種」を出版し、全 19 報で約 80 新種を記載。これらは日本語で書かれ、記載に基づいたタイプ標本の情報が記されていない。Owston が横浜で死去。

【1918 年】 ZUMT 8304–8542 (239 標本)

田中が Jordan より日本語での新種記載を控えるよう注意される。

【1920 年】 ZUMT 9514–9955 (442 標本)

田中が助教授に就任。

【1923 年】 ZUMT 10954–11703 (750 標本)

関東大震災により、タイプを含む標本と田中の蔵書の一部が失われる。また、黒岩恒によって採集された種子島産標本の大部分も失われた。

【1926 年】 ZUMT 17471–17612 (142 標本)

田中がスタンフォード大学に留学する。

【1927 年】 ZUMT 17613–18145 (533 標本)

田中がスタンフォード大学より帰国する。多様な魚類標本に触れ、スプリッター（種を分けることを好む）からランパー（種をまとめることを好む）へと意識が変わる。カリフォルニアで標本を採集、購入して持ち帰る。富山一郎が東京帝国大学理学部動物学科に入学する。当時の動物学教室は弥生門近くの 3 階建て、その東側に位置した。

【1928 年】 ZUMT 18146–18863 (718 標本)

富山が田中の最初の弟子となる。高知高等学校教授の蒲原稔治が魚類の研究を始め、高知より標本が多数送付されるようになる。田中による昭和天皇への御進講が始まり、退官まで続く。

【1929 年】 ZUMT 18864–19658 (795 標本)

富山が卒業研究として「タイ科魚類の形態」に取り組む。魚河岸より魚を持ち込む人がおり、多少珍しい魚があれば田中が買い上げていたという。

【1930 年】 ZUMT 19659–23472 (3814 標本)

富山が大学院に進学し、「日本産ハゼ科魚類の分類学的研究」に取り組む。富山が田中より標本整理の一部を任されるようになる（23 冊目の標本台帳より）。

— 当時の標本室の様子 —

標本室は田中の部屋と廊下を隔てて建物の隅角部を占める広い部屋で、半地下であり、暗室としてあった。小型標本は種ごとに分けられ、1~3 個体より多い数個体以上が採集地を問わず直径 12 cm 高さ 25 cm の広口瓶にまとめて保存されていた。大型標本は直径 30 cm 高さ 60cm の円筒形のガラス容器に保存されていた。標本の保存液はほぼホルマリンであった。天井に届く丈夫な棚が設置され、最下段に大型、そのうえの数段に広口瓶、最上の 2 段に小型瓶が田中（1913）の分類順に並べられていた。標本には墨で書かれた番号札が二重の白い糸で結び付けられていた。小型種で同時に多数採集されたものは、瓶でまとめて 1 つの番号が与えられていた。標本台帳は大学ノートであった。

【1931年】 ZUMT 23473–24241 (769 標本)

田中の「日本産魚類図説」の出版が48巻で終了する。この年の途中から標本登録は専ら富山によっておこなわれる。富山が5月と10月に有明海へ初めての採集紀行。田中が学位論文「On the distribution of fishes in Japanese waters」を出版し、学位を取得。これ以降、徐々に現役を退く。

【1932年】 ZUMT 24242–25291 (1050 標本)

富山が10月に富山湾魚津・滑川へ採集紀行、多量の標本を収集する。阿部宗明が東京帝国大学理学部動物学科に入学する。

【1933年】 ZUMT 25292–26314 (1023 標本)

田中が動物学雑誌の編集を担当し、富山と福田宗一は校正の補助をおこなう。前年に動物学科を卒業し、三井海洋生物学研究所に勤務する石田寿老より多数の標本が提供される(2021年にZUMT 標本登録)。

【1934年】 ZUMT 26315–30195 (3881 標本)

阿部宗明が田中の門下生となり、フグ類の研究を開始する。赤門付近の理学部二号館(3階建て地下1階)に動物学教室が移転する。富山、阿部が地下標本室への移動を担当する。標本瓶のうち大型の円筒形ガラス瓶はもろくなっているものがあつたという。田中は3階の部屋に移動し、自室には標本瓶を持ち込まないと宣言。富山が結婚、田中が祝辞を述べる。

【1935年】 ZUMT 30196–31513 (1318 標本)

本年より蒲原がときどき動物学教室を訪問して、田中に師事する。阿部が大学院に進学する。犬尾三郎が門下生となり、ベラ類の研究を開始する。

【1936年】 ZUMT 31514–37460 (5947 標本)

阿部がパラオ熱帯生物研究所に滞在する。

【1937年】 ZUMT 37461–38679 (1219 標本)

富山が学位論文「Gobiidae of Japan」を出版し、学位を取得。阿部がパラオより帰国する。石田が門下生となり、前年より同年にかけて滞在していた樺太より持ち帰ったサケ目標本を用いた研究をはじめ。1929年より田中に標本を提供していた増田繁雄が東京帝国大学理学部動物学科に入学する。太平洋戦争が開始する。

【1938年】 ZUMT 38680–39287 (608 標本)

田中が教授に就任し、三崎臨海実験所の所長を兼任する。田中が還暦を迎え、祝賀会にて牧野富太郎が祝辞を述べる。富山が上海自然科学研究所に赴任する。

【1939年】 ZUMT 19288–40390 (1103 標本)

田中が定年により退官する。標本の管理は大学院生の阿部が引き継ぐ。田中夫妻を囲む会が開催、牧野が出席。

【1940 年】 (登録なし)

阿部主導により研究室、標本室が同館の別室に移動する。阿部が修士課程を修了し、動物学教室の研究生となる。1942 年にかけて田中と牧野がたびたび会食する。

【1945 年】 (登録なし)

田中が北海道に在住。太平洋戦争が終戦。終戦にともない富山が上海より帰国。

【1946 年】 (登録なし)

富山が三崎臨海実験所に勤務。

【1947 年】 (登録なし)

阿部が農林省東海区水産試験所に任官。

【1948 年】 (登録なし)

富山が東京大学職員として研究室を利用する。

【1949 年】 (登録なし)

富山が宮内庁侍従職御用掛となる。

【1952 年】 ZUMT 47742-47821 (80 標本)

富山が三崎臨海実験所の所長に就任する。阿部が学位論文「日本近海産マフグ科魚類の分類学的研究」を出版し、学位を取得。田中が蒲原の招きにより、高知大学で講義をおこなう。

【1953 年】 ZUMT 47822-48354 (533 標本)

富山、阿部により「日本産魚類図説」の 49 巻以降が編纂される。

【1955 年】 ZUMT 48365-48584 (220 標本)

富永義昭が東京大学理学物生物学科に入学する。

【1958 年】 ZUMT 49193-49571 (379 標本)

富山、阿部による「日本産魚類図説」の出版が 60 巻で終了する。

【1959 年】 ZUMT 49572-50901 (1330 標本)

富永が修士課程として富山の門下生となる。

【1960 年】 ZUMT 50902-51924 (1023 標本)

富山が教授に就任する。阿部が東海区水産研究所資料部の主任研究官に任官する。

【1961 年】 ZUMT 51925-52195 (271 標本)

富山がサラワクに出張する。サラワク博物館の Tom Harrison より標本の寄贈を受ける (2021-2022 年に ZUMT 標本登録)。

【1963年】 ZUMT 52308–52312 (5 標本)

富永が博士課程を中退し、三崎臨海実験所の助手に就任する。

【1965年】 ZUMT 52313–52332 (20 標本)

田中は水戸に在住し、学名に関する著書（未発表）の執筆をする。

【1966年】 (登録なし)

東京大学に総合研究資料館が新設され、富永の主導、阿部や学生の補助のもと標本室と研究室が移動される。保存液をホルマリンからエタノールに変える作業が開始される。富永が助手を退任し、家業を継ぐ傍ら、理学部の非常勤講師として魚類の研究をつづける。

【1967年】 (登録なし)

田中が東京に移住。富山が九州大学天草臨海実験所に赴任し、資料館に魚類の専任教員が不在となる。

【1968年】 ZUMT 52333–52419 (87 標本)

富永がハタネボ科魚類の研究で学位を取得。資料館の第二拡張工事により、標本室と研究室が拡張され、動物学教室に残されていた多数の無脊椎動物標本も資料館に移動される。

【1969年】 ZUMT 52420–52422 (3 標本)

佐藤寅夫が阿部に師事し、大学院生としてフエフキダイ科魚類の研究をはじめめる。

【1970年】 ZUMT 52423–52706 (284 標本)

富山が九州大学天草臨海実験所を退官、東京に移住し、書物や別刷りを資料館に寄付する。

【1973年】 ZUMT 52888–52986 (99 標本)

佐藤が資料館の助手に就任。

【1974年】 ZUMT 52987–53507 (521 標本)

田中が死去。黒田長礼が弔詞を述べる。

【1976年】 ZUMT 53954–53987 (34 標本)

佐藤が臨海実験所の助手を兼任。

【1977年】 ZUMT 53988–54152 (165 標本)

阿部が東海区水産研究所資料部を退職し、海洋水産資源開発センターに就職する。

【1978年】 ZUMT 54153–54181 (29 標本)

田中生誕 100 年の集いが開催される。司会は阿部、追悼談が富山、石田、阿部、青山 茂により述べられる。佐藤がフエフキダイ科魚類の研究で学位を取得する。

【1981年】 ZUMT 54246-54413 (168 標本)

1月に富山が勲三等瑞宝章を受賞し、富山先生を囲む会が開催される。3月8日に富山が死去。阿部が築地おさかな普及センター資料館館長に就任し、午前中は資料館に滞在、午後は築地おさかな普及センター資料館で勤務するようになる。

【1983年】 ZUMT 54414-54415 (2 標本)

藍澤正宏が富永事務所に就職し、技術補佐員として資料館に勤務する。富永は月の半分の週末に資料館を訪問する。

【1984年】 ZUMT 54416-54590 (175 標本)

富永、藍澤によりタイプカタログの作成が開始される。

【1985年】 ZUMT 54591-55268 (678 標本)

藍澤が2月から5月にニュージーランドへ出張、多数の標本を持ち帰る。資料館に新館が増設され、富永主導により標本室、研究室が現在の場所に移動される。

【1989年】 ZUMT XXXX-XXXX (XXX 標本)

坂本一男が富永事務所に就職する。

【1990年】 ZUMT 58920-59755 (836 標本)

坂本が資料館の客員研究員となる。

【1991年】 ZUMT 59756-59791 (36 標本)

藍澤が富永事務所を退職する。

【1993年】 ZUMT 59873-59879 (7 標本)

藍澤が千葉県立中央博物館分館 海の博物館に就職する。

【1994年】 ZUMT 59880-59883 (4 標本)

白井 滋が富永事務所に就職し、ツノザメの研究をおこなう。長田美子により標本台帳の電子化が始められる。富永が死去。

【1996年】

東京大学総合研究資料館が東京大学総合研究博物館となる。阿部が死去。

【1997年】

坂本が築地おさかな普及センター資料館館長に就任する。

【2010年】

黒木真理が東京大学総合研究博物館マクロ先端研究発信グループ助教に赴任する。

【2012 年】

黒木真理が任期満了につき退職。

【2021 年】

小枝圭太が東京大学総合研究博物館マクロ先端研究発信グループ助教に赴任する。外部研究者、学外ボランティアの補助により ZUMT 標本カタログの製作を開始する。

ZUMT 魚類標本に関わった人物

現在までに ZUMT 魚類標本の収集、管理、寄贈など関わった人物は 1000 名を超える。これらのうち一部の人物について ZUMT 標本との関わりも含めて以下に列挙する。

—ZUMT 標本の収集・管理に関わった人物—

【田中茂穂 Shigeho TANAKA】(1878–1974 年)

1878 年に高知で生まれ、1901 年に東京帝国大学理学部動物学教室に入学し、1903 年より魚類の研究を始める。きっかけは 1901 年に大阪で開催された内国勸業博覧会に展示された鹿児島産の魚類標本 259 点の同定を動物学教室の 3 代目教授の箕作佳吉からすすめられたことによる。在学中は箕作および 4 代目教授の飯島 魁に師事する。1904 年に大学院進学にともない ZUMT 魚類標本の収集を開始し、1930 年代にかけて魚類標本提供のネットワークを構築する。東京帝国大学理学部動物学教室の 8 代目教授。田中による近代的な魚類学への取り組みは米国スタンフォード大学の D.S. Jordan の影響を強く受けており、日本において体系的に魚類のコレクションを収集・管理をおこなった初めての人物といえる。1913 年には Jordan とその弟子の John Otterbein Snyder との共著で 1235 種の魚類を収録した「A catalogue of the fishes of Japan (日本産魚類目録)」を出版し、日本の魚類学の基礎を築いた。1926 年から 1927 年には当時学長だった Jordan に呼ばれてスタンフォード大学に留学、滞在中は Jordan より家族同様の待遇を受けたと残している。この留学を機に、スプリッター (種を分けけることを好む) からランパー (種をまとめることを好む) へと意識が変わったことも記されている。田中は生涯で約 300 編の研究論文と 50 冊にも及ぶ書籍を出版しており、これらのなかにはギンザメ類をはじめとして約 170 種の新種の記載も含まれるが、ランパーとなり自身で同種異名とした種もある。また、日英併記で日本産魚類を記載する「日本産魚類図説」を 1911 年から 1931 年まで出版し、その費用のほとんどを自費で賄った。1913 年には魚学雑誌を刊行し、月刊誌として魚類をはじめとする幅広い水生生物の研究結果発信に努めたが、7 号を出版したのち同年中に廃刊となる。標本収集の際には、産地情報を記録することを徹底し、現場で方言名などをタグに記録して結び付け、市場で購入した標本であっても産地を記録することに注力した。「産地なきものは標品としての価値大半消失す」とまで述べている。淡水魚、海水魚を問わず、川や海岸において自身でも各地で採集をおこなうとともに、地元の子供や釣り人などに依頼して収集をおこなった。日本中から集めた魚類標本とその産地情報に基づき、1931 年に学位論文「On the distribution of fishes in Japanese waters (日本産魚類の分布)」を出版している。この論文は日本列島の海水魚の生物地理学

的特性を論じた初めての論文であると同時に、現在の知見においても通じる極めて先進的な論文であったといえる。1939年に定年退官後はご子息の住む北海道や高知、水戸、伊豆で暮らし、1967年に上京した。この間、ZUMT 標本に関わった痕跡はないが、弟子である富山一郎や蒲原稔治とは関係が続いたようである。人柄については、各書に残された文字より推察するに、権威的とは真逆であり、自身と同じく魚類（あるいは生物や自然現象）に興味をもつ人間には分け隔てなく接していた様子がうかがえる。例えば、1935年に出版された田中著の「魚の随筆」のなかで、「高等学校の学生増田君（のちの門下生である増田繁雄）の採集方法は中々面白い。」として、その方法を紹介しているが、帝国大学の助教授が高校生の採集方法に興味をもつ姿は田中の純粋さが現れているように感じられる。一方で、実直な性格なため、目上の人であっても齒に衣をきせず持論を述べて周囲を驚かせる場面もあったという。一方で、高知県尋常中学校（現在の高知追手前高等学校）に在籍時のちの物理学者である寺田虎彦と同級生で親交があったが、寺田が主席を続けていたため、田中は敗北感から五年生の時にうつ病を病んだことが残されている。また、第一高等学校に進学した後も、眞鍋嘉一郎ほか秀才に圧倒され、うつ病が再発し、一年間休学したことも記されている。成人後はこれを克服し、全く無縁であったとされる。寺田や眞鍋のほか、同郷の植物学者である牧野富太郎や動物学教室の先代教授となる谷津直秀、鳥類学者の黒田長礼などと親交が厚かった。最も美味しい魚はイワシとし、ビールは好まず日本酒を好んだ。ただし酒に強くはなく、富山一郎の結婚式で泥酔し、富山自身が車で自宅まで送り届けたという逸話もある。1974年12月24日に逝去。ZUMT 標本台帳の記録によると、田中自身が収集した標本は1270標本と全体の4番目であるが、採集者として名を記していない場合も多く、実際にはさらに多くを収集していると推察される。

【富山一郎 Ichiro TOMIYAMA】（1906–1981年）

1906年に釜山で生まれ、中学までを釜山で過ごした。高校から鹿児島島の七高（第七高等学校造士館）、1927年に東京帝国大学理学部動物学教室に入学した。田中茂穂の最初の弟子として卒業論文より魚類の研究を始め、修士以降のテーマである日本産ハゼ類に関する研究は、国内におけるハゼ類研究の礎となった。戦前は1931年より有明海や富山湾に採集紀行として訪問し、多数の標本を収集しているほか、1930年以降、ZUMTの標本登録を田中より引き継ぎ、田中が収集し、未整理・未登録のままとされていた標本の登録作業を精力的に進めた。1937年に学位を取得し、上海自然科学研究所に赴任する。上海でも精力的に研究し、揚子江（長江）などから多数の標本も収集したが、終戦に伴い研究成果も含めたこれらすべてを置いて帰国せざるをえなかったため、そのほとんどは世に出ていない（富山 1953）。戦後は東京大学理学部附属三崎臨海実験所などで勤務する傍ら、ZUMT 標本の整理にあたった。また、当時の昭和天皇の御研究のお相手をつとめるとともに、当時の皇太子殿下（現在の明仁上皇陛下）のハゼ科魚類の御研究の助言者、相談役でもあった。富山は「魚が好きでたまらない」とか「分類学に大きな興味と抱負をもって」といった情熱的な性分ではなく、田中の情熱に引きずられるように魚類の分類学の道へ進んだことが本人によって記されている。ただし、標本の収集に興味がなかったわけではなく、初めて行った富山湾や有明海の調査は「非常に楽しかった」と記しており、戦後も五島列島に赴き多数の標本を収集するなど、収集活動も精力的におこなった。1961年には1年間

サラワクに出張し、サラワク博物館より標本の寄贈を受けている。1967年に九州大学天草臨海実験所に赴任して以降は、ZUMTの魚類標本には関与しなくなったようである。1981年3月9日に逝去。富山が収集した標本は2787標本とZUMT標本台帳のなかで最多である。

【阿部宗明 Tokiharu ABE】(1911–1996年)

1991年に東京で生まれ、1919年にご家族とともに台湾に移住、そこで台北高等学校に進学、卒業し、1932年に東京帝国大学理学部動物学教室に入学した。卒業論文より田中茂穂の弟子としてフグ類の研究を始め、1935年に修士課程に進学、1940年に修了。戦前は富山とともにZUMT標本の管理や標本室の移動にも尽力した。1936年冬から1937年にかけての1年間パラオ熱帯生物研究所に滞在し、376種2600標本を収集して持ち帰りZUMTに収蔵した(ZUMT ABE 2700–6000番台前半と推察される)。このうち水産種の多くはバベルトゥアップ島の南岸で日本人漁業者が網で漁獲したものであり、非水産種についてはパラオ中部の島で採集したものである。これらパラオ産標本のほか、1970年代まで標本を収集しているものの、阿部が収集した標本のほぼ全ては、標本タグの標本番号に下線を付した個人コレクションとして管理されており、また、これらに対応した標本台帳にあたるノートの大部分が紛失している。このため、現在では採集地などの情報が不明であるものが多数を占めていることは誠に残念である。これらの多くは、ZUMT標本庫内にZUMT標本と混在して保管されているため、本目録内ではZUMT ABE XXXXXとして扱っている。戦後は、1947年より農林省東海区水産試験場に農林技官として任官された。このころの遠洋調査において太平洋の広域から収集された標本はZUMTに登録され、その一部は新種として報告されるなど極めて貴重である。1952年には「日本近海産マフグ科魚類の分類学的研究」により学位を取得。1977年に同試験場を退職すると、1981年からは築地おさかな普及センター資料館の館長となり、1996年に逝去するまでのあいだ、同資料館とZUMT(当時は東京大学総合研究資料館に移っていた)を行き来しながら研究を続けていたという。阿部が収集し、ZUMTに登録した標本は204標本と少ないが、これには数千あるいは数万にもおよぶ阿部の個人標本(目録ではZUMT ABEとして扱った)は含まれていない。

【蒲原稔治 Toshiji KAMOHARA】(1901–1972年)

1901年に高知で生まれ、1923年に東京帝国大学理学部動物学教室に入学した。卒業研究では魚類を扱わなかった蒲原は、1926年に同大学を卒業後、1928年より高知高等学校の教授となり、魚類の分類学的研究を開始する。これ以降、高知産の魚類標本が頻繁にZUMTに登録されるようになり、また、1935年以降は田中茂穂に師事して、1939年に学位を取得する。それ以降はZUMTへと高知の標本を送ることはほとんどなくなったものの、1949年に高知大学文理学部教授となり、岡村 収や尼岡邦夫など数々の魚類学者を輩出する日本有数の魚類分類学研究室を作りあげた。蒲原により提供された標本は640標本であり、そのほとんどが高知産。

【犬尾三郎 Saburo INUO】(1910–1945?年)

阿部宗明の1歳年上であった犬尾は、阿部より1年遅い1935年に田中茂穂の門下生となった。犬尾は卒業研究でベラの研究を始め、1936年と1937年には沖縄島に採

集紀行で赴き、ベラ科魚類をはじめとする多数の標本を収集している。ホンベラの性的二型に関する論文などを残しているが、太平洋戦争でフィリピンにて戦死した。犬尾が門下生となる前年の1934年に佐賀県藤津郡の犬尾文郎より多良川産のチチブやエドハゼの標本がZUMTに提供されていることや、犬尾姓が全国的にも珍しい苗字であることを考慮すると、犬尾文郎と犬尾三郎の親縁である可能性が高い。犬尾三郎により提供された標本は665標本であり、そのほとんどが沖縄産で一部が神奈川など関東産。

【石田寿老 Jyuro ISHIDA】(1908–1994年)

島根県出身で1929年に東京大学理学部動物学教室に入学した。卒業研究では魚類分類学を扱わなかった石田は、1932年に卒業後、三井海洋生物学研究所で勤務する。この頃に収集した標本をZUMTに提供した。また、三井海洋生物学研究所のラベルが付いた標本瓶がZUMT標本庫内に未整理で置かれており(2022年現在、順次登録を進めている)、これらの標本は同研究所が閉所となる際に石田によって引き取られたものであると推察される。1935年より1年ほど樺太に滞在し、収集したサケ目の標本を持ち帰りZUMTに登録した。1936年より田中の門下生としてこれらを用いた研究をはじめますが、のちに研究対象は変わり1945年に「淡水魚(メダカ)の孵化酵素に関する研究」で学位を取得する。以降、東京帝国大学理学部動物学科で助教授と教授を務めるが、樺太の標本を登録したのちは、ZUMTに標本を登録していない。石田により提供された標本は773標本であり、そのほとんどが樺太産または三井海洋生物学研究所在籍時に提供された静岡県産。

【増田繁雄 Shigeo MASUDA】(1917?–1945?年)

1929年、当時中学生であった増田は田中に標本を提供するなど懇意にし、研究室への出入りも許可されていた。高等学校在籍時には三崎に数日間滞在して、土地の漁業者と懇意となり、価値のない混獲物の提供を受けるという方法で標本を収集したという。太平洋戦争のさなか、上海自然科学研究所に富山を訪ねた記録が残されているが、その後に戦死した。

【富永義昭 Yoshiaki TOMINAGA】(1936–1994年)

1955年に福岡県立修猶館高等学校を卒業後、東京大学理学部生物学科に入学、修士課程に進学し、三崎臨海実験所の教授であった富山一郎の弟子としてハタンポ科魚類やキンチャクダイ科魚類の解剖に基づく分類と系統や幅広い魚種の鰓の形態に関する研究をおこなった。1963年には博士課程を中退し、三崎臨海実験所の助手に就任する。1966年に家業である天洋水産、福岡運輸、福岡倉庫、横浜海運、富永事務所、札幌低温運輸などの株式会社で社長業を営むため、助手を退任する。以降、理学部の非常勤講師として研究を続け、ZUMT標本の収集と管理もおこなった。月の前半を福岡、後半を東京で過ごす生活であったため、月の後半の休日には東京大学総合研究資料館で研究や標本の整理をする超人的なハードワーカーであった。1968年には学位論文「ハタンポ魚類の分類と形態」を出版して学位を取得する。大学院進学以降、三崎周辺や奄美大島などで自身でも魚類標本を収集し、福岡の市場や家業である天洋水産がおこなう東シナ海での底曳網漁によって収集された魚類を数多く収集・登録している。また、当時の東京大学が所有していた白鳳丸や淡青丸などの調査船の航

海に同上して魚類標本を収集している。1983 年以降は富永事務所の秘書として藍澤正宏や坂本一男、白井 滋を雇用し、ZUMT 標本の管理や自身の研究の補助にあてた。さらに私財を寄付金として資料館に入れ、標本瓶や薬品を購入するだけでなく、当時としては革新的なコンピューターによる標本管理システムを構築するとともに、元東京大学理学部で事務員を務めた長田美子を雇用して標本台帳のエクセルデータ化や文献のデータベース化を進めた。標本を永続的に管理するための保存瓶にも工夫を重ね、蓄電池用のガラス水槽を大型標本の保存容器として使用するなど、現在の標本庫の管理体制の土台を作り上げた。1984 年より藍澤とともに ZUMT タイプカタログの製作に取り掛かるも、1994 年に 57 歳で逝去。富永により採集、提供された標本は 664 標本だが、採集者として名を記していない場合も多く、実際にはさらに多くを収集していると推察される。

—ZUMT に標本を提供した人物—

【赤松邦太郎 Kunitaro AKAMATSU】

1907-1909 年まで台湾総督府中学校教諭として勤務する。台湾赴任の前にはシロウオの文化的研究をおこない、箕作佳吉や渡瀬庄三郎と交流があった。帰国後は 1921 年に広島高等師範学校、1925-1926 年に高知高等学校に勤務した。高知県沖の島で 1926 年に採集した標本を蒲原稔治経由で ZUMT に提供しており、両名の交流が伺える。台湾をはじめ、高知、愛媛、長崎などで標本を収集し、50 標本を ZUMT に提供した。

【青木熊吉 Kumakichi AOKI】(1863-1940 年)

神奈川県三崎出身の漁師であり、1886 年に東京大学の三崎臨海実験所が開所して以降、研究者の海洋生物採集を手伝い、箕作佳吉以降の多数の研究者たちと関わりながら海洋生物の採集に従事した。優れた操船や採集能力をもち、深海生物を含む数多くの生物を採集、提供して研究者たちを支えた伝説のハンターで、「熊さん」の愛称で親しまれた。1898 年には採集人として臨海実験所に雇用され、1925 年に定年退職した。ZUMT 標本台帳によると、青木は田中茂穂（東北地方：1906 年）、飯島 魁（フィリピン、シンガポール：1909-1910 年）、岡田弥一郎（利島：1920 年）と採集紀行に出ているほか、相模湾産の魚類を多数提供している。青木によって提供された標本は合計で 525 標本。青木個人が収集した標本には短冊状の小さな紙タグに学名、産地、「熊」あるいは「くま」と書かれていることが多く、未登録の標本も散見される。

【青木尠雄 Takeo AOKI】(1887 年生まれ)

1910-1912 年にかけて静岡県水産試験場の技師として静岡県浜名湖周辺で収集した標本を提供し、この一部を報告した。1915 年より台湾総督府中央研究所の大島正満の助手として、台湾の淡水魚類の研究を開始し、1917 年にはタイワンマスを発見した。その後も 1944 年まで台湾の台北、台南、基隆の水産試験場で技師として勤務し、淡水魚、海水魚を問わず数多くの標本を ZUMT に提供した。青木によって提供された標本は 495 標本にのぼる。

【蜂須賀正氏 Masauji HACHISUKA】(1903–1953 年)

旧徳島藩主蜂須賀家の第 18 代当主で鳥類学者。黒田長礼の影響で鳥類学者となり、1921 年イギリスのケンブリッジ大学に入学。鳥類採集のため世界中に採集紀行をおこない、フィリピンのミンダナオ島南部アポ山の登頂に初めて成功した。同採集紀行の過程で立ち寄ったザンボアンガの市場で収集した魚類標本を ZUMT に提供した。岡田弥一郎とともに渡瀬庄三郎に働きかけ、日本生物地理学会を設立した。鳥類の分布の違いに基づき、沖縄諸島と八重山諸島間の生物地理区の境界（蜂須賀線）を発見した。

【羽根田彌太 Yata HANEDA】(1907–1995 年)

岐阜県大垣市出身で、分類群を問わず発光生物の研究を幅広くおこなった。1937–1942 年にかけて、南洋パラオ熱帯生物研究所の研究員として 4 回出張し（うち 1940 年までに 2 回）、その間にフィリピン、ボルネオ、ラバウルにも出張した。1942–1945 年には昭南博物館（現在のシンガポール国立博物館）に副館長として勤務するかたわら、マレーシア、ジャワ、セレベスにおいても研究を進めた。戦後は 1955–1974 年まで横須賀市博物館館長を務め、東南アジアを中心に発光生物の研究を続けた。ZUMT には 1935–1938 年にパラオで、1937 年にボルネオ島で収集したものを中心に 176 標本が提供された。

【Albert William HERRE】(1868–1962 年)

アメリカのスタンフォード大学の魚類研究者で、1930 年前後にフィリピン産の魚類を多数 ZUMT に提供した。Herre によって提供された標本は 120 標本。

【星野伊三郎 Isaburo HOSHINO】

和歌山県粉河中学校や海南中学校に勤務し、1914–1925 年にかけて同県で収集した魚類を ZUMT に提供した。また、大分県宇佐中学校にも勤務し（時期不明）、同県の魚類も提供した。星野によって提供された標本は 297 標本。

【飯島 魁 Isao IJIMA】(1861–1921 年)

静岡県浜松出身で、東京帝国大学理学部動物学教室にて初代教授の Edward Sylvester Morse の弟子となる。Morse の弟子として、佐々木忠次郎とともに日本人として初めて発掘調査をおこない、茨城県三浦村の陸平貝塚を発見した。寄生虫学を中心として海産生物の研究をおこなうとともに、国内外の採集紀行で得た標本を ZUMT に提供した。1906 年に北海道から樺太へ採集紀行をおこなった。1909–1910 年には青木熊吉とともにフィリピンのマニラおよびホロ、インドネシアのバタビア（現在のジャカルタ）、シンガポールまで採集紀行をおこない、数多くの標本を持ち帰った。飯島によって提供された標本は 359 標本。

【今井倭武 Masatake IMAI】

1929–1930 年にかけて台湾の台北医学専門学校に勤務し、台北近郊の魚類を数多く ZUMT に提供した。台湾に赴任する以前は新潟県に在住し、1923 年に新潟県で採集された多数の標本を提供した。戦後は愛知学院大学の歯学部で教鞭をとった。今井によって提供された標本は 228 標本にのぼる。

【勝木重太郎 Jyutaro KATSUKI】

北海道水産試験場室蘭支所に勤務し、1913–1925 年にかけて北海道（主に室蘭産）で収集した標本を多数提供した。勝木によって提供された標本は 418 標本。

【金子一狼 Ichiro KANEKO】

長崎市の医師であり、博物学者。鉱物、植物、貝類、魚類などを収集した。長崎産魚類の分布および方言の調査をおこない、長崎で得られるサメ類、ホウボウ科、ニベ科の方言について報告した。ZUMT には 1908–1929 年（ほとんどは 1915 年以前）に長崎で収集した海水魚標本を提供した。金子によって提供された標本は 343 標本。金子が収集した標本には「産地 長崎、採集 ○○月」と書かれた状態の良い大きな紙タグが同封されていることが多い。

【片山正夫 Masao KATAYAMA】

広島県広島市に在住し、1930–1933 年に瀬戸内海で採集されたキセルハゼ *Gymnogobius cylindricus* (Tomiya, 1936) のホロタイプを含む魚類を ZUMT に提供した。また、1934 年には沖縄島糸満で採集した複数の標本も提供した。

【河上才次 Saiji KAWAKAMI】

熊本県立高等女学校で教鞭をとり、熊本市場や有明海において主に水産種収集した。これらの標本に基づき、熊本でみられる魚類とその方言について報告した。ZUMT には 1911–1916 年にかけて収集された 86 標本を寄贈した。

【加藤光次郎 Kojiro KATO】（1906–1981 年）

東京帝国大学を卒業後、1932–1941 年にかけて三井海洋生物学研究所で石田寿らと勤務して、エボシダイとカツオノエボシに共生関係がないことなどを研究した。ヒラムシなど幅広い分類群を研究対象とし、生涯を通じて 111 の新種および 11 の新属を発表した。ZUMT には三井海洋生物学研究所時代に収集したと思われる下田付近で採集した 19 標本を提供している。採集年は記録されていないものの、標本番号から加藤が研究所を退所した翌年に受け取ったものであると推察できる。

【菊池勘左衛門 Kanzaemon KIKUCHI】（1895–1980 年）

新潟県佐渡出身。1918 年以降、富山県魚津中学校や高岡中部高等学校で勤務し、富山湾の貝類研究をおこなうとともに、富山湾産の魚類標本も数多く提供した。また、1920 年に佐賀県立佐賀中学校で勤務した際に収集した佐賀県産の主に淡水魚の標本も ZUMT に提供した。菊池によって提供された標本は 380 標本。

【木下盛枝 Morie KINOSHITA】

福岡県柳川市にあった柳河高等女学校（現伝習館高等学校）で教鞭をとり、魚類や植物の標本を収集していた。戦前に収集した標本の大部分は ZUMT にあり、これらの標本をもとにして 1933 年には『柳河ノ淡水魚』をまとめている。木下の標本は京都大学の旧大津臨湖実験所の標本群にも少数含まれており、戦後は九州大学の内田恵太郎、塚原博両氏に協力し多数の標本蓄積に貢献した。

【黒田長礼 Nagamichi KURODA】

旧筑前福岡藩黒田家の14代目当主で鳥類学者。渡瀬庄三郎に師事する。田中茂徳と親交が深く、黒田自身による収集のみならず黒田経由で田中へと提供された標本も多い。田中によって記載されたクロダハゼ *Rhinogobius kurodai* (Tanaka, 1908)は都内に所在した黒田邸の池から発見されたことに因む。黒田によって提供された標本は605標本。

【黒岩 恒 Hisashi KUROIWA】(1858–1930年)

高知県出身で1892年に沖縄尋常師範学校に赴任、1920年に和歌山へと転居するまでの間、沖縄県内の複数の学校で教鞭を執りながら、沖縄の動植物を研究した。1897年には尖閣諸島に渡り、島々を調査して「尖閣諸島」を命名したことで知られる。1912–1923年にかけて与那国島ら種子島にかけて琉球列島の広域で数多くの魚類を収集して、ZUMTに提供した。これらの標本に基づき Jordan & Tanaka (1927)は「The Fresh water fishes of the Riukiu Islands, Japan」を出版し、黒岩自身も同年「琉球島狐に於ける淡水魚類採集概報」として各島における地方名や島ごとの分布情報とともに報告した。また、黒岩によって採集された標本に基づき、田中は複数の淡水魚を新種として記載した。黒岩により ZUMT に提供された標本は573標本にのぼる。

【桑野久任 Hisatada KUWANO】(1876年–)

ギボシムシ類の研究をおこない、1901年に東京帝国大学理科動物科を卒業し、大学院へ進学する。1904年に同大学の助教授に就任し、在官のまま清国の北京大学の教授として招聘される。1910年には奈良女子高等師範学校の教授となっていることから、ZUMT 標本台帳に記録された清国産の標本は1904–1910年のあいだの北京大学での勤務時に収集したものである可能性が高い。なお、ZUMTには1898年に中国の白羊淀産で採集された標本が京師大学堂師範館動物学教室に在籍した桑野より提供された記録がある。桑野によって提供された標本は、一部、鳥羽や信州松本、吉野川などの国内産であるものの、大部分は清国あるいは満州国産と記録されている。後者については、1932–1945年に採集されたものであろう。

【前川善四郎・鈴木貞次郎 Zenjiro MAEKAWA and Tejiro SUZUKI】

1955–1957年にかけてインド洋や太平洋といった海外産の標本を数多く提供した。彼らによって収集、提供された標本は277標本。

【松崎明治 Meiji MATSUZAKI】(1898–1950年)

鹿児島県知覧町生まれ、早稲田大学美術科・哲学科卒業。1929年から1942年まで朝日新聞社文化部で釣魚欄の担当記者として活躍した。1938年には『釣百科』、1939年には『写真解説 日本の釣』、1942年に『釣技百科』を相次いで刊行した。松崎の著書は学術的視点を含み、また鮮明な写真も含むことから民俗資料としての価値も高く、類書は他にない。松崎は朝日新聞記者の時代から魚類研究者と親交があり、1942年に朝日新聞を辞め故郷に戻ってからも東京大学や九州大学から研究委託を受けて自宅で魚類標本を作成していた。ZUMTには朝日新聞記者時代の2標本のみが登録されているが、九州大学には数百点の標本が現存する。

【宮代周輔 Shusuke MIYASHIRO】(1888–1969 年)

神奈川県大磯出身の植物研究者で、横浜工業学校および東神奈川工業学校において教鞭をとった。横浜市を中心に神奈川県内、国内各地、遠く中国東北部や朝鮮半島北部で植物や鳥類の標本を収集したことが知られているが、ZUMT には神奈川県産の魚類 107 標本を提供している。

【中原綱作 Tsunasaku? NAKAHARA】

三重県富田中学校、三重県尾鷲町尾鷲高等女学校ならびに三重県三重郡富田町県立第二中学校で教鞭をとった。採集年月日は不明なものが多いものの、一部の標本は 1916–1919 年にかけて収集されている。三重県における地方名とともに同県産の 97 標本を ZUMT に提供した。

【丹羽 彌 Hisashi NIWA】(1899–1984 年)

岐阜師範学校を卒業。愛知県立名古屋第一高等女学校、岐阜県立中津高教諭などを経て、1941 年より聖徳学園女子短大教授として勤務する。木曾川水系の魚類を研究し、アジメドジョウを新種として記載した。丹羽により岐阜県や愛知県の淡水魚 50 標本が ZUMT に提供された。

【岡田彌一郎 Yaichiro OKADA】(1892–1976 年)

石川県加賀市出身で、東京帝国大学で博士号を取得、東京高等師範学校、三重水産専門学校、三重県立大学等の教授を務め、定年後は東海大学教授、日本魚類学会の初代会長などを歴任した。魚類、爬虫類、両生類の分類学的研究をおこなった。1915 年には、五島清太郎に随伴してパラオを訪問しているが、ZUMT への標本提供はない。1924 年には渡瀬庄三郎とともに、朝鮮半島産の両生類、爬虫類、魚類（主に北部産の淡水魚）の標本を収集し、これらを含む 117 標本を提供した。

【大恵尚一 Shoichi OOE】

静岡県浜松市高等魚学校において教鞭をとり、魚類の標本を収集していた。浜名湖において数多くの魚類を収集し、ZUMT には 169 標本を寄贈した。

【大島正満 Masamitsu OSHIMA】(1884–1965 年)

北海道札幌出身で、東京帝国大学を卒業後、台湾総督府中央研究所に 1907–1924 年にかけて勤務した。その間、1917 年にはアメリカのスタンフォード大学に留学し、D. S. Jordan に師事し、留学中に青木赴雄が発見したタイワンマスをも Jordan と共著で発表した。淡水魚を主として台湾と奈良産の 72 標本を ZUMT に提供した。筆名は尾島鳥秋。

【押津義雄 Yoshio OSHIZU】

八丈島三根村に在住し、1929 年に採集された同島産の魚類 202 標本を提供した。八丈島周辺で活動する漁師あるいは篤志家であると推察される。

【坂口総一郎 Soichiro SAKAGUCHI】（1887–1965 年）

和歌山県出身の生物学者で、1920 年代に沖縄県立第一中学校として働くかたわら、沖縄県産の主にサンゴ礁性魚類や淡水魚の標本を数多く提供した。1918–1920 年まで所属した和歌山県海草中学校、1925 年以降に赴任した和歌山師範学校時代には和歌山県産の標本も ZUMT に提供した。沖縄在住時には沖縄島や離島を含めたさまざまな地域の写真や記録を残しており、昆虫や植物をはじめとする沖縄の自然誌研究を幅広くおこなった。坂口により ZUMT に提供された標本は 1446 標本にものぼる。

【佐藤春吉 Haruyoshi SATO】

台湾の基隆中学校において教鞭をとり、台湾産の魚類標本を収集した。台北や基隆のみならず日月潭においても魚類を収集し、ZUMT には 166 標本を寄贈した。

【瀬能 宏 Hiroshi SENOU】

神奈川県立生命の星・地球博物館の現学芸員。博士課程では沖山宗雄に師事し、東京大学総合研究博物館（水産動物部門）で過ごした。藍澤らと共に西表島産魚類を中心に 1000 標本以上を採集した。

【多田綱輔 Tsunasuke TADA】

1896–1897 年にかけて、東京帝国大学理学部から台湾へと派遣された。台湾で動物の標本を収集した初めての日本人であり、ZUMT にも彼が 1890 年代に台湾の各地で収集した 52 標本が提供されている。

【田辺貞夫 Sadao TANABE】

1914–1924 年にかけて青森、秋田、岩手といった東北地方沿岸で採集された標本を多数 ZUMT に提供した。1925 年以降、沖縄へ渡り、恩納村や今帰仁村運天、那覇などから数多くの標本を提供した。田辺により提供された標本は 1340 標本。このほか比屋根良隆と共に那覇で収集した 317 標本も提供した。

【鳥羽源蔵 Genzo TOBA】

岩手県師範学校や岩手県盛岡師範学校で勤務した博物学者。同県の植物や昆虫を中心に数多くの標本を収集し、1897–1934 年にかけて収集された魚類標本が ZUMT に提供された。鳥羽によって提供された標本は 300 標本。

【角田春斉 Haruhito TSUNODA】

福島県磐城郡小名濱小学校の教員。1931–1933 年にかけて採集した福島県産の 92 標本を ZUMT に提供するとともに、地方名や珍しさについての情報も提供した。

【内山 操 Misao UCHIYAMA】

八丈島に在住し、内山芳五郎（あるいは吉五郎）とともに 1921–1922 年にかけて採集された同島産の魚類 362 標本を提供した。1 標本のみ小笠原諸島父島産の標本も提供されており、八丈島周辺で活動する漁師あるいは篤志家であると推察される。

【内山柳太郎 Ryutarō UCHIYAMA】

明治時代の貝類学者であり、1904–1916 年にかけて本邦産貝類図説を連載した。ZUMT には 1906–1912 年にかけて淡路島福良で採集した魚類標本を提供していることから、貝類採集の傍ら収集した魚類を田中茂穂に提供していたことが推察される。内山により 113 標本が提供された。

【宇井縫蔵 Nuizo UI】(1878–1946 年)

和歌山県出身の生物学者で、田辺小学校や田辺高等女学校で教員として勤務し、1912–1921 年にかけて和歌山県産の標本を数多く提供するとともに、当時の地方名や普通か稀かなどの情報も残した。田中と頻繁にやり取りをし、1924 年には紀伊半島の魚類について詳細にまとめた「紀州魚譜」を出版する。宇井によって提供された標本は 666 標本。

【渡瀬庄三郎 Shozaburo WATASE】(1862–1929 年)

江戸生まれ、札幌農学校を卒業後、東京帝国大学理科大学動物学教室に入学し、箕作佳吉に師事する。1910 年より東京帝国大学動物学教室の第 5 代教授に就任。生物地理学を研究し、南西諸島の生物相調査の過程でトカラ列島に分布境界線が存在することに気が付き、1926 年にこれ発表した。この分布境界線は岡田弥一郎により「渡瀬線」と名付けられ、現在でも用いられている。日本生物地理学会の創立にも深く関わった。ZUMT には 1903–1912 年にかけて主に琉球列島や富山県滑川、対馬、台湾などから収集した 97 標本を提供した。

【八木貞助 Teisuke YAGI】(1879–1951 年)

長野県出身の地質学者で、長野師範、長野中学、長野高等女学校、伊那高等女学校、飯田高等女学校などの教諭を歴任した。田中が信州の淡水魚類の研究をおこなった際、その手伝いをした。ZUMT には長野県産の淡水魚 108 標本を提供しているが、一部の標本が 1921 年に採集されている以外の採集年は不明である。

【山村樞次郎 Umejiro YAMAMURA】(1865–1949 年)

【山村八重子 Yaeko YAMAMURA】(1899–1996 年)

鳥取県出身。1885–1897 年にかけてアメリカサンフランシスコにて歯科医を営む。1917 年よりフィリピンのバシラン島で 600 ha の椰子園を経営する。1925–1926 年にかけてバシラン島に滞在した二女である山村八重子と共にバシラン島、ミンダナオ島や近隣の地域・海域、フィリピン全土から多数の動植物（鳥、魚、虫、貝、サンゴなど）の標本を収集した。ZUMT に提供された魚類標本は淡水、海水を含む 633 標本にもものぼる。1926 年、膨大な量の生物標本とともに丹後丸にて日本へと戻る帰路の途中、フィリピン沖合の船上にてアポ山調査へと向かう蜂須賀正氏と出会った記録がある。山村が収集した標本には「山村樞次郎、フィリピン」と墨で書かれた布タグが付されていることがほとんどであり、ZUMT 標本台帳にも山村樞次郎の名で登録されているものの、山村八重子の手記には川で魚を採ったことが記されていることから、両名により採集されたものと考えるのが妥当である。山村樞次郎と山村八重子は 1936 年 10 月にはフィリピンのケソン大統領の招待うけて国会的祭典に参列し、八重子は式後にバシラン島をはじめとする東南アジアを訪問した。この際にも鳥類、

昆虫類、貝類、魚類などを収集し、1937年3月にめきしこ丸で帰国している。魚類の採集は主に夜間に磯にいる魚を突いたと記録されている。この採集紀行で収集されたと考えられる標本は、1938年に山村樸次郎の名でZUMTに登録されている。狛江町の自宅には依然として多量の生物標本が保管されていたことが知られ、魚類標本のなかにはノコギリエイやテッポウウオをはじめバシランおよびザンボアンガ産の淡水魚、バシラン海峡およびスールー産の海水魚が含まれていたとされる。

【柳井隆一 Takaichi YANAI】

島根県松江高等学校で教鞭をとり、のちに島根大学文理学部生物学教室に勤務して両生類、爬虫類、昆虫類、魚類の研究に携わった。島根県産の魚類303標本をZUMTに提供し、これをもとに1950年には山陰地方の魚類の分布境界についての論文を発表した。ZUMTへの標本提供や同定結果等に際し、田中茂穂、富山一郎、犬尾三郎と連絡を取っていた。

【屋代弘孝 Hirotaka YASHIRO】

沖縄県において昆虫類（主に害虫類）を研究した。沖縄島や八重山諸島において数多くの魚類を収集した。ZUMTには1924-1925年にかけて収集された沖縄県産魚類172標本を寄贈した。

【吉兼宗一 Soichi YOSHIKANE】

愛知県女子師範学校および名古屋市愛知女子師範での教鞭をとった。1925-1933年にかけて収集した愛知県産の66標本をZUMTに提供した。

Figure 1. Number of registered specimens in ZUMT in each year.

